

ふたたび、五月の巻 おまけ

ある晴れた日に

晴天が少ない五月にあつて、この週末だけは例外。ハレ女の面目躍如ではあるが、屋外ではないので天候の如何は問わない。それでも晴れは晴れである。商業施設のイベント広場には陽光が射し込み、眩まばゆい。

昨年は連休の最終日だった。定例で行うと今年は連休の真っ只中に当たる。メンバーが集まりにくいこともあったが、今年度からは試みに隔月にして、代わりに実施地点数を増やす予定にしていたこともあり、とにかく五月のポケビ（通称）での「拾って、調べて」は見送っていた。だが、どこかで集まらないことには気が済まないのがメンバーのいいところである。

さて、前々から話はあつたので、スケジュール的には問題なかったが、逆に上出来過ぎて気が引けることもある。バンド活動の一環ながら、セッションでもリハーサルでもない。二度目のコンサートイベントがこうも早々に実現するとは！というのが実感であり、今日がその当日なのである。

仕掛人はもちろん、冬木との関係各位なのだが、今回のステージ実現にはもう一人立役者がいた。長女が一段落したことで、四月半ばから当店に復職を果たした京みやこ、その人である。

「では、ASSEM・・・ Oh Hey with ASSEMBLYの皆さんによるステージの前に、ちょっとしたパフォーマンスをお届けします。」

別に広報とか催事とかのご担当ではないのだが、一応、復職した部門が以前と同じ服飾関係ということもあり、そのパフォーマンスの性格上、そのまま司会進行に当たっている。

「クリーンアップ、ご存じですよ。野球の三・四・五番のことじゃないですよ。単純に言うゴミ拾い。でも彼等の取り組みはただ拾っただけじゃありません。拾って分けて調べて分析して、というのが特徴です。調査型クリーンアップとも言いますが、とにかくそのクリーンアップに適したファッションというのがございます。今日はまずそのファッションショーをお目にかけてよう」と。

司会が手を挙げると、ポケビのボサノヴァ ver. が流れ、俄かバックヤードから HIGATA @ シスターズがゾロゾロと登場。四月の回で、ASSEMBLYの知名度は上がっていたので、それ目当ての客は多く、イベント広場はちょっとした人ばかり。その庄のせいも、舞台慣れしている蒼葉あおはですら躓すきかける。後に続く櫻、弥生、舞恵にも連鎖し、どこことなくコメディチック

な幕開けとなってしまった。BGMが緩やかな分、救われているが、これでアップテンポなDance Mixだったら弾みでドタバタ劇になっていたかも知れない。まずは足場の確保、そして転んでも平気な格好で、といったお定めが期せずして説得力を持つことになる。

ケガの予防という点で、どんなに暑くとも肌の露出をできるだけ抑えるのがポイント。ただし、着たり脱いだりというのが少しはできた方がいいので、上着の基本はニットボレロとチュニツク。下はハーフパンツまたは通気性の良いジーンズというスタイルがオススメ。

シヨールとは言え、衣装をチャンジして入れ替わり立ち代わりという訳ではない。とりあえず出て来てもらって、京が一つずつ解説を入れていく感じ。自前の帽子はいいとして、ゴミ袋やクリップボードをアクセントとして手にしているところがまた一味違う。お互い知った仲でもあるので、小道具の話から、会話の二つ三つも交わされることになる。トークショーの趣、といった方が良さそうだ。とりあえず前半の四人、実践スタイルは終了。

「続いては、先生と生徒というパターンを想定したコーディネートです。どーぞ！」

後半三人は、石島姉妹に何と文花という異色の組み合わせ。そう言われればそう見えなくもないが、一応おそろいなもんだから、多少の無理はあっても三姉妹で通る可能性はある。

「なかなかイイ感じだと思いませんか？ 学校行事でクリーンアップをなさる時は制服や体操服と言わず、私服でいいのでこうした統一感を持たせたコーデで、と思います。」

京はどうかと言えば、セレブチックながらもクリーンアップ対応型の出で立ちにはなっている。つまり、そのままステージが上がっても支障はない訳だが、さすがに親子でクリーンアップというシーンを設定するのは気恥ずかしい。娘達は母親の名司会ぶりに気を良くしていたので、いつになくニコニコ顔。「こっちは来なよ」とでも言いたげだったが、母は結構つれない。目を合わせても知らん顔である。

さて、女性優位なのは公然・周知の通りだが、男性が出て悪いことはない。業平、千歳、八広、六月のブラザーズも遅まきながら顔を出す。イマーツシャキとした感じがしないが、きちんと年令順、背の順で出てくるところはさすがである。

クリーンアップ向けとは言っても男子については普段着とあまり変わらないのが泣き所。それでも冬木の入れ知恵とやらで、ポケット多めの軽量ベストなるものを羽織っているのもっともらしくはなる。加えて蒼葉の指導でポーズの決め方についても練習しておいたのでまあとりあえず形にはなった。が、それにしても、である。

「軍手はめて指差してもちよつとねえ」

「お姉ちゃん、聞こえちゃうよ」

バックヤードからは姉妹の会話が筒抜け。十代姉妹を除く女性五人は笑いをこらえている。

BGMが止まったところで、女性七人も再度ステージへ。永代がいたらまた何とかと声を上げそうな場面だが、今、この様子を正面から押さえているのは仕掛人、いや裏方、さらに撮影 兼 取材、つまり一人何役も負っている冬木である。ステージからはみ出しそうな十一人を目の前にしてただ喜々としていて、一人on the floor 状態。

今回のショー、本来なら現場で催した方がリアリティは出るのだが、ファッション側面を重視するなら屋内でも十分。服装や持ち物、クリーンアップ時の注意点などを併記すれば、ある程度現場感覚も出せる。流域情報誌の特枠の一つ、先月号に続くちょっとしたエンタメ記事はこれでバッチリ。以前、蒼葉に持ちかけた件、ここに完結、である。

「宣伝になってしまいますが、着用してもらっている服は全て当店でお買い求めいただけます。クリーンアップ、またはそのファッションにご興味をお持ちいただけましたら、後ほどまた売場にお越しくくださいませ。なお、素材の一部には再生材料を採り入れたり、できるだけ長持ちするような工夫を施してあります。」

京がスラスラとやっている途中ではあるが、今度はステージ狭しと、楽器の類が並び始める。奏者はそのまま。文花、小梅、六月は小拍手に送られながら一旦退場となる。

「えー、泣く泣くご用済みとなりましたら、その際は当店にまたお持ちください。回収後、また違った用途に再生・再利用させていただきますんで・・・ あ、そろそろ準備できましてでしょうかね。」

小梅が再び現れて、初音に楽器を手渡す。若干の音出し、チューニングを済ませたら、とりあえずスタンバイOKである。ここからは司会役が交代となる。

「石島さん、ありがとうございます。ここからは、わたしたち、本多業平と ASSEMBLY のミニコンサートをお贈りします。まずは一曲目『届けたい・・・』、聴いてください。」

櫻はそのままマイクをスタンドにセットすると、得意の即興でイントロを奏でる。八広のカウントが入ったら、あとは練習通り。軽快な曲だけにメンバーの動きは至って滑らか。クリーンアップ用のスタイルゆえ、というのもある。動きやすいというのは何につけ要点なのだ。

スタジオセッションを重ね、徐々に腕を上げてきた初音だが、人前で演奏するのは今回が初。南美の代役として、いやあくまで一人の奏者として今、壇上にいる。間奏はすぐ回ってきた。

母と妹が見守る中、肺活量の丈をその管楽器に吹き込む。音量オーバー気味ながら、グッと来るものが感じられる。それは何かを「届けたい」とする想い。曲のテーマに違っていいば、それでいいのである。

二曲目は小編成でサラリ。初音と舞恵が抜け、『Beat the with breeze』が弥生のリードで演奏される。そして、作曲者による簡単なMCの後、『Smile』で締め。実にコンパクトなステージだったが、会場は大いに賑わった。京がトークを入れる前にアンコールがかかる。一応、ステージを後にしたので、拍手に引つ張られる格好になるが、こういうイベントでは勢いが肝心。人前得意のルフロンは、他のメンバーをすっ飛ばして参上、そして、

「皆さん、どうも！ ではでは、不肖、奥宮舞恵が書いた一曲、今度は生演奏でお届けします。『ポケットビーチ』です。」

予定調和ではあるが、このノリにはおそれいった。初音は改めて魔女さんに敬服しきり、となる。だが、いつものお姉さん、お兄さん達と、小さいながらも一緒のステージに立てることが何より嬉しい。ボサノヴァversusなので、全体的にしっとり演っているのだが、サククスだけはつつい力が入ってしまうこととなる。

三十分弱にてコンサートは終了。メンバーの一人だが、この間、冬木の出演はなし。ギターソロ無用の選曲だったこともあるが、さらにまた別のお役が控えていたからである。

動画記録など、ひととおりこなした後、文花と仲良く(?)テーブルに着く。ステージが終わると今度は販促スタッフに早変わり。販売するものと言ったら、もうこれしかない。CD、コンパクトディスクである。

四月のセッションは、リハーサルでお世話になったスタジオで時間をかけて行った。その時にそれ相応の録音とミキシングをし、何とミニアルバムを制作してしまったというんだからちょっとしたものである。

初音にはまだ荷が重かったので、生サククスが入らなくても済む曲を中心に六曲分。自主制作、枚数限定で、試験販売に付されることになった。今日が初売りである。

メッセージ性を考慮するなら、紙ジャケという手もあったのだが、調達しやすいうところでバイオプラスチックのケースを採用。楽曲以外にマインドを織り込める要素はできる限りオリジナル仕様になっている。ジャケットは蒼葉画伯による描き下ろし。歌詞カードの本文、つまり詞の部分は何と小梅が筆をとった。関係するwebサイトの情報やQRコードなども付いているのは、聴いて、見て、アクセスして、行動して、といった地域貢献のプロモーションを期しての設定。何だか只ならぬ一枚である。

そんな付帯情報の一つであるエングリーンマップについては、その場で実機によるデモが行われていて、販促との相乗効果を生んでいる。仕事となるとこの女性は強い。いい意味でそのトークは鋭く、操作音同様、ピピッと仕切っている。業平はそんな弥生の様子を見守るばかり。迂闊に近づけない、というのが正直なところのようだ。

バンドマネージャーの意向では、今回の試験販売による売り上げはクリーンアップ基金に積み立てることとして、今後も好調なようなら、いずれはメンバーにも還元、という話になっている。もともとがおまけのような取り組みなので、大した期待はないのだが、展開の仕方によっては、法人の事業収入の一部、ソーシャルビジネスの足し、そして何よりバンドの運転資金にだってなり得る。ここは一つまたプロセスマネジメントを用いて、*How*を皆で考えるのがいいだろう。

せっかくの好天なので、屋上庭園（懐かしの「光と緑の広場」）に席を設けて小打上げが行われることになった。用意したCD三十枚はめでたく完売となったので、そのお祝いを兼ねての一席でもある。

ふ「今日お求めいただけなかったお客さんて何人かいたわよね。かえって申し訳なかったわねえ。」

や「そのうちダウンロード販売もやっていいんじゃないかって、ねえ田さん？」

今は打って変わって、和やかな弥生嬢である。お仕事中は決してツンツンしている訳ではないのだが、ツンデレ傾向が見て取れる。業平は少々面食らうも、

「その辺のノウハウってイマイチなあ。榎戸さん、ご存じ？」

「まあそう来ると思って、その筋の人物に話聞いたりはしてます」

「プロセスはどうかオープンに。頼みますね。」

櫻の念押しも至って穏やか。これでちょっととした談笑の場となる。

あ「それはそうと、六月の準備は？ 特に若手主催会場。」

こ「誕生月の彼に任せてあるけど。ね、六月クン？」

む「下見は済ませたし、集積場所も確認したし」

ハ「あそこは、漂着よりも現場投棄が多いんだっけか」

こ「岩の効き目を確かめるならあえて手を出さないってのもあるけど、本格的なバーベキューシーズン前に片付けておくのが筋かなあって。抑制ですね。」

女性最年少ながら、姉御の貫禄たっぷり。一同、頷くしかない。

さ「トーチャンズも一緒、なんだっけ？」

む「あとは永代先生も。子ども達、何人が連れてくるみたい。」

や「子ども達ねえ……」

む「後輩、かな？」

京と初音はその日はお出かけデーとかで、不参加とのこと。案ずる必要はないのだが、つ

いつい気が回ってしまう面々である。

ち「となると、DJは誰が？」

ふ「ま、私も行こつかなって思ってるから。堀之内だけじゃ心配だし。」

こ「もつ魚が出てきても大丈夫ですもんね」

ふ「そ、そう言えば・・・」

さ「そつそつ、ソウギヨとか」

何となく固まってしまう文花だが、ルフロンが自前のカウベルでカンカンやるもんだから、それどころではない。

「ハハ、カンカンで思い出した。カモンのセンセよ。もつすぐ新しい本出るから、そのお祝いもしなきゃ、ってね。どう？」

六月五日は昨年同様、講座を一つ持ってもらうが、その際、出版記念会も、というのが事務局長の一策である。

ち「あとは、指定管理者正式決定の件もありますね」

ふ「業平さんに前からご指導いただいたおかげで登記もすんなり済んで、ほぼ予定通り。

だからその内祝いも同じ日かなあ、と。」

ま「ほんじゃまたパアツ！てやりますか？」

さ「環境の日だから、控えめにね」

ま「櫻姉みたいにさ、自分がチヨーおめでたい人はそれでいいかもしないけどさ」

さ「いつつもパアツて感じなのどこの誰よ？ ルフロンはね、何もしくないくらいで丁度いいの。」

スーパァーからの差し入れ品には、アルコール類は確が含まれてなかった筈だが、二人とも絡む絡む。カウンターの応酬、ここに再現である。

だが、観衆がけしかけれることもなかったので、いつしかしっとりモードになっていて、舞恵は次にはこんなことを訊ねてきた。

「そついや、結婚記念品つてどした？」

「ああ、いいこと聞いてくれました。六月君に教えてもらおうと思ってたんだ。ちょっといい？」

千歳でなくて六月？ 小梅をはじめ、一団は一気にざわつくことになる。

「いいなあ、オイラも乗りりたい」

「そのイイ席押さえるのって、裏技があるんでしょ？ 何か知ってるかなあって思ってた。」

「調べてメールしますよ」

「ありがと、六さん」

「それにしても千歳に行くのに飛行機じゃなくて寝台でつてのはまた・・・」

「あ、聞こえちゃっうよー」

櫻のいいものとは、婚前だか何だかのかにかく旅！ということのようだ。目的地の一つは決まっているようだ、この二人にかかれればそれは余興に過ぎない。道中、つまりプロセスが重要なのは言うまでもない。

舞恵と八広、石島親子はまだ残ると言う。冬木と業平は帰途に着くも別方向。弥生は彼氏と一緒にディナー、という選択肢もあったが、日常的に顔を合わせているので、今日は弟とおとなしく帰宅することにした。送迎バスの最終便に乗り込むは、そんな姉弟、それに千住の姉妹、あとは文花、千歳である。

以前なら千歳がひと足先に降車していたのだが、

「あれ、蒼葉ちゃん、降りちゃっうの？」

「あ、言ってなかったっけか。お兄様のお宅にね、ほぼ移転完了したんで。」

「ああ、とっかえっこ・・・ てことは千さん、居候？」

「ま、そう言えばそうだけじ」

「お試し何とかって言うでしょ。フフ」

六月のいる手前、あまり激しいことは口にできないが、

「花婿修行、だね」

言うことが違つのは自他共に認めるところ。中学生になって益々冴えてきた、とは姉君の弁である。

バスはゆっくり橋を渡る。進行方向と逆、ツバメが荒川を掠めて飛び去っていくのが見えた。車窓から見渡せる西の空はまだ、明るい。